### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	岡田譲著『□會人類學の基本問題』、石田英一郎著『文化人類學序 說』、西村朝日太郎著『文化人類學論攷』
Sub Title	Y. Okada : Basic problems in social anthropology, E. Ishida : An introduction to cultural anthropology, A. Nishimura : Essays in cultural anthropology
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.7 (1960. 7) ,p.110- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00224504-19600715-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

岡 田 譲著

『社會人類學の基本問題』

石田英一郎著

『文化人類學序說』

西村朝日太郎 著

『文化人類學論攷』

## はじめに

カでは文化人類學、イギリスでは社會人類學、ヨーロッパ大陸では、文化人類學にとり全人類的な視野から検討するに適わしい中心は、文化人類學にとり全人類的な視野から検討するに適わしい中心は、文化人類學にとり全人類的な視野から検討するに適わしい中心は、文化人類學にとり全人類的な視野から検討するに適わしい中心族が異なるにしたがいそれぞれ獨自の特徴をしめすことが多い。例族が異なるにしたがいそれぞれ獨自の特徴をしめすことが多い。例表ば、同じように文化と社會の問題をとりあつかいながら、アメリえば、同じように文化と社會の問題をとりあつかいながら、アメリえば、同じように文化と社會の問題をとりあつかいながら、アメリえば、同じように文化と社會の問題をとりあって、ときには國家や民様が異なるには、大阪の神経の世界においては、科學に國境はないといわれながら、社會科學の世界においては、

それぞれの國家的な枠組が附きまとつているように思われることが

に次々と出版された次の三つの著書にも顯著に反映しているようにこのような事態は、たまたま、昨年度(昭和三十四年)九月以後

に比較檢討することによつて、以上の問題を中心に若干の考察を加思われる。そこで本稿においては、それら三つの著書を同時に相互

えたいと思う。

著書には、また、旣發表の論文の再錄されたものが多い。 なお、各著書の發行所および發行期日は次のとおりであるが、各

社會人類學の基本問題(以下『基本問題』と稱す)有斐閣、昭和

ことに質問をも、以下『序む』:海上) 等級三十四年九月二十五日發行

月十五日發行文化人類學序説(以下『序説』と稱す)時潮社、昭和三十四年十

オミュニーニー しまをテ文化人類學論攷(以下『論攷』と稱す)日本評論新社、昭和三十

四年十二月二十九日發行

それぞれの著者がとりあげる問題點や、その性格上の共通する點と一次に、それらの五つの問題別に、各著書の各論文を紹介しながら別に分けると、おおよそ、次のような一覽表にしめすことができる。

相違する點を指摘したいと思う。

民族學といつたように、その學問上の名稱から性格にいたるまで、

題別著書	社會人類學の基本問題	(七編)	文化人類學序說	(七編)	文化人類學令 次	(九編)
立場性	社會人類學の性格	(昭 29 )	文化人類學の目的と對象	照 <b>32</b> )	文化學の形成人類學と人間學	昭 昭 26 34
基礎概念	文化の性格	(報 34 )	文化の概念	(昭 <b>34</b> )	民族文化の意義	(昭 32 )
2. 說	文化變動物條集團	昭昭昭 34 32 33	人類學とヒューマニズム唯物史觀と文化人類學世界史と文化人類學大開民族と原始文化	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	環境論の再吟味 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	昭昭昭 23 25 34
の日本社会	日本における同族研究の意義	留 34 )	氏族制時代論	留 32	日本文化の範型	(昭 23
的民族	アタイヤル族の社會構成	(昭 <b>24</b> )			セラン島の社會組織セイロン島の民族と文化	留留 32 30 )

### 立場性

『基本問題』においては、社會と文化の解明に際し、かなり徹底したイギリス社會人類學上の立場が堅持されている。すでによく知られているように、この社會人類學の流れは、マリノフスキー、ラられているように、この社會人類學の流れは、マリノフスキー、ラられているように、それとは別個の「文化を中心とした科學」といわれているように、それとは別個の「文化を中心とした科學」とかわち、いわゆる文化人類學とは著しい對照をしめす。社會的歷史的事實の分析に當つて「社會」と「文化」のいずれの面から分析といわれている。すでによく知り本がある。

化と社會の兩概念を明確にすることなく、すべての社會的事實を文

介と批評

れに立つということにもなるといえよう。

判されたのである。化人類學の名のもとに難多に研究しようとしている、と前者から批

部とせず、文化の擔い手としての社會を取り上げ、集團的次元を强 文化人類學の名を採るか、社會人類學の名を好むかがきまつて來る」 せてしまうか、又はこれと異つた次元のものと考えるかによつて、 性を明らかにしている。しかしながらその場合に、文化と社會の分 味から、社會人類學の名を選び度いと思う」(一八頁)と、その立場 調した、イギリス社會人類學の功績を認め、この點を明瞭にする意 と『基本問題』の著者は述べながら、「私は社會を以つて 文化の一 各々の次元に沿うて研究を續けると共に、兩者の關連を明らかにす 個所で、「文化を人間行爲を形作つている 要因としての價値・理念 く、最近のクローバーとパースンズの共同提案を紹介した「註」の 類に關し著者は、別段、詳しく自己の見解をのべているわけではな 相互關係體系」の次元に注目する好みをもつ故に、社會人類學のそ だから著者の立場性の取得は、 著者の説明する限りでは、「特定の る方向に進むべきだ」と主張しているに止まる(傍點筆者二○頁)。 とのべ、さらに「一方を他方によつて説明してしまうのではなく、 の方は、個人及び集團間の特定の相互關係體系」と定義したらよい の類型・及びその他の象徴的意味體系」と考え、「社會(社會體系) ところで、「文化という 概念に社會構造も 集團もすべてを包含さ

論が成立することになるのである。

の象徴的意味體系の問題の優位性が主張されねばならないという議院、変化の視面に分離することだけが必要なのではないだろうか。さらにまは、この兩者の闘連を明らかにする方向に進むべきだというのではないだろうか。さらにまい、この兩者の闘連を明らかにする方向に進むべきだというのではは逆に、文化の相對的狀況よりの具體的分析のために、特定の相互の緊急の課題になるのではないだろうか。もしそうだとすると、或の緊急の課題になるのではないだろうか。もしそうだとすると、或の緊急の課題になるのではないだろうか。もしそうだとすると、或の緊急の課題になるのではないだろうか。もしそうだとすると、或の象徴的意味體系の明理を使いた方式を関係を見ないという議論に対している。

が同時にふくまれている(三頁)。さらに「文化人類學は最初から、と規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の立場性が、間答の形式で展開されている(こと規定する文化人類學の言葉を表現しての人類文化の科學」ところで、『序論』においては、「全體としての人類文化の科學」ところで、『序論』においては、「全體としての人類文化の科學」ところで、『序論』においては、「全體としての人類文化の科學」と

どこまでも互視的な科學で、その特徴は、つねにその當時の水準に おける全人類的な見透しを背景とする 點にある」のだから、「現實 されるならば、彼は文化人類學者とよばれうるであろう」(傍點筆者 に、ある特定の民族なり文化内容なりが、ある學者の専門の研究對 別した「社會」にその對象を限定しなければならないか、という點 ことにもなる。社會人類學は、何故、とくに意識的に「文化」と區 象となつていても、その研究が……他の文化との關連を意識してな こそ、社會學と區別された文化人類學の固有の課題が存するのでは ならば、それと不可分の關係において、社會をも含めた文化の全體 を問題にとりあげ、「社會の構造的=機能的な研究が 學問的に可能 つと、イギリス社會人類學の立場は、また、次のように評價される 七頁)とその立場性を具體的にしめしている。このような立場にた なかろうか」(九頁)と反問しているのである。 構造も、 また重要な研究對象でなければならぬ」として、「ここに

他方を前提とする關係に立つことになり、「文化人類學は、 人類文 において人類文化に一般的なプロセスとつながる。それは、また、 観的な人類文化史とつながりをもち、第二の有機的=統合的全體性 といつてもよい。そして、この二つの對立領域は、たがいに一方が 歴史と科學、記述と分析を一個の學問體系に統合しようとする立場 著者のこのような立場は、第一の時間的空間的全體性において巨

> 化における反復的=普遍的な傾向率ないしは法則性を求める、その にある」(一六頁)と考えられているのである。 なく、先史時代をも、より一そう嚴密な基礎の上に解明できる立場 《科學》としての學問的課題を果すことにより、現在の文化ばかりで

で觸れるところがないのは営然であろうが、それでも、その點につ 構成においては、具體的現實的な調査研究に際しての分析圖式にま なくない。そして、一般的指針としての互視的な包容力をもつこの つていたが、著者のしめす「全體性」の構成には獨創的な見解が少 =普遍化主義との、双方の對立的立場は長い期間の論爭の原因とな ろであるといつてしまえばそれ迄のことであるが、それ以外の、現 それは、著者のこれまでの文化史的民族學の系譜の然らしむるとこ 族制時代論のような史的次元の問題としてとりあげられているが、 い。この點の具體的な展開は、主として、未開民族の原始文化や氏 いての著者の構成の、高度の抽象性に難點のあることも否定できな ところで、文化人類學における歷史主義=相對主義と、分析主義

點を輕視することによつて、一片の文明批評が哲學的文化理論に雙 思われる。というのは、さもなければ、多くの有益な示唆に富む、 開が期待されるか、その點の明らかにされることが希ましいように この壯大とまでいえるような巨視的な構成は、微視的な問題との接

在的時點に定位した微視的問題の集約的分析にどのような具體的展

介と批評

<u>一</u> 四

する危機があるからである。

學的、後者を自然科學的とみなし、「人間は精神と肉體との統合で 把握を志向する一つの人間學」と、「人間の懲奏ないしは歷史の把握 ある以上、文化と形質との統一的關連において把握されねばならな (形質人類學的)を極めて一般的な形で紹介しながら、前者を精神科 を検討しようとして英米的な見解(文化人類學的)、大陸系的な見解 を志向する他の人間學」との二つを區別する點から出發している。 「かかる認識原理に基いてこそ、始めて綜合人類學、肉體と精神の だから「新しい人類學においては制御を求心的契機とする全體性の 活動過程として現われている」からに外ならないというのである。 ては、肉體的なものと心的なものは完全に合一し、連續的全體的な れようとしている。 というのは、「機能的全體としての生物におい 生物學や精神身體醫學的な諸研究に求めることによつて、再檢討さ 限界科學を乘り超えるための層位的構造論克服の理論的基礎を量子 い」(傍點筆者二五頁) という立場をとる。 このような「精神」と 人間學と人類學との關係を明らかにするため、人類學の基本的性格 對立を超克した人類學の成立は可能となるであろう」(四三頁) と述 概念を當然原則的發見的な認識原理とみなすべきであろう」とし、 「肉體」の反律をめぐる古くからの哲學論爭は、また、それぞれの 『論攷』においては、人間考察の 二つの立場を、「人間の本質の

主張しているもののように理解されるのである。めることに代置され、その上に立つての「綜合人類學」の立場性を體の對立を止揚するための生物學的=發生學的=生理學的基礎に求べている。いわば、自然人類學と文化人類學の統合點は、精神と肉

ところでこの問題は、哲學的な本質把握の人間學を一方の極におところでこの問題は、哲學的な本質的不變者を追求する人間學」と一體何の關係があるのか、著者の説明からは全く理解できないよと一體何の關係があるのか、著者の説明からは全く理解できないよと一體何の關係があるのか、著者の説明からは全く理解できないように思われる。

は、文化人類學の諸成果を整理、統合して次の發展に備えるために全般的な理論體系の建設を志向する文化人類學原論、乃至は文化學がねて――」の論文についても指摘できる。そこでは、ホワイトのかねて――」の論文についても指摘できる。そこでは、ホワイトの所以――棚瀬氏『文化人類學』の批判を同じことは、「文化學の形成――棚瀬氏『文化人類學』の批判を

ながら、ホワイトの「文化科學」と後者の「文化人類學」が根本的 場をしめそうとする逆説的な立場性を『論攷』の著者は表明してい や『序説』のように、それはそれなりに一つのハツキリした立場性 に關連づけられるのかも全く不明である。 あるいは、『基本 問題』 り、この點の混同にも理解に苦しむ點が多い。さらに、著者のいう に異なる立場にあることは人類學者の間においては自明の事柄であ 文化人類學の原論ともいうべきもののように解釋している。 しかし 書を主として文化學說と文化一般の理論的説明を意圖している點で も必要であろうと思う」(傍點筆者一三一頁)とのべ、棚瀬氏の前提 をしめしている立場とは異つて、一定の明確な立場性をとらない立 「文化學」と前にのべられた「綜合人類學」とは、また、どのよう

るのだろうか。

の體系である」(傍點筆者七〇頁)と規定される。また別の個所で、 面である」とされ、それに對し「文化」は「集團に支えられた行爲 係體系」である「社會」は、ここでも「構造の面であり人間集團の 會」と「文化」の兩次元の問題をとりあげ、その對比において文化 の性格をやや詳しく論じている。「個人及び集團間の特定の相互關 『基本問題』においては、前にのべた著者の立場性を決定する「社

介と批評

應、相互關連に關して、そこに一定の法則を見出す」(八四頁)こと 體を作り上げている」(八三頁)とのべ、それら「文化諸相の相互適 能とも呼ぶことができ……、互に關連し合い適應し合つて統一的全 は幾つかの面あるいは相に分れ……それらの文化の諸相は社會的機 化」の概念を考えているらしいフシがある(七〇頁)。さらに「文化 構造の面である「社會」に對し、いわば「社會的機能」としての「文 てしまつていることになるのであろうか。 保體系(二○頁)が、構造の面(社會)と機能の面(文化)に分裂し 會體系と呼ばれたもの、すなわち、個人及び集團間の特定の相互關 ができるように肯定している。そうすると、ここでは、すでに、社

あろうか。さらにいえば、「擔い手」としての社會や集團の次元を特 頁)という提案は、事實上、無意味に等しいことになりはしないで **續けると共に、兩者の關連を明らかにする方向に進むべきだ」(二〇 うて」研究を續けると前に主張したことすらすでに不可能に近いこ** の兩次元を考えている」(七〇頁)と主張するが、「各々の次元に沿 實、「社會人類學は社會的事實を分析するに當つて《社會》と《文化》 た文化の次元の諸相の重要性は輕視できない筈であり、著者も、事 集團的次元を特に張調する社會人類學の立場ですら、右に述べられ とになりはしないであろうか。まして「各々の次元に沿つて研究を このように考えて來ると、文化の擔い手としての社會を取り上げ、

ニニキこ

化ということば」(第一節)のもつさまざまの意味を古今東西にわた を紹介することによつて、五年以前の論文「社會人類學の性格」に のである。むしろ、アメリカの文化人類學者による文化概念の論議 をさらに明確にする基本點が明らかにされたようには考えられない 一バー共同執筆の論文「文化概念」の紹介以外に、著者自身の立場 で示された「文化の性格」の章では、有名なクラックホーンとクロ ることにもつと意味があるといえないだろうか。少なくとも、そこ に强調することよりも、「何を擔つているか」の文化の次元を强調す 同時に新しく發表されたかなり 詳細な論文が收錄されている。 「文 麦明されたその立場性は、かえつて混亂したように見受けられる。 判しながら「文化の實在性」(第二節)を明瞭に指摘していく。 强靱 り長い間の重要な論爭過程がみられるが、それらを適切に紹介、批 する。アメリカの人類學者の間における文化概念の規定には、かな つて解説し、今日の人類學でいう文化の概念を明確に限定しようと 頁)というのが、その終始一貫した基本的立場であるといえよう。 く、單なる外國學者の學說紹介以上に 獨創的なものが多い。「文化 な論理に支えられた その説得力ある 論據には 注目すべき ものが多 ものであり……これを否定しては文化人類學は成立しえない」(三八 の客觀的實在性こそが、まず文化の科學的認識の基本的前提をなす ところで『序説』においては、文化の概念につき、本書の發行と

必然性を指摘し、他の生物と區別される人類獨自の様相を、言語と する際の人類の起源そのものの探究にまでさかのぼらねばならない る「社會」と「言語」の二つの文化の範疇をその圖式の中央にすえ 域に分類されねばならないと主張する。さらに、技術の文化と價値 容または項目を技術と價値の兩面にわたる意志・行爲・物體の三領 の内容と組織」(第四節)は、文化の構造的理解のために、文化の内 志――のそれぞれの過程について解明する。そして、それら「文化 いう媒體によつて蓄積された經驗の三つの領域――技術・感情・意 さらに「文化の起源と形成」(第三節)において、文化の起源を探究 る全體」(第五節)は、これらの範疇が一定の相互關係において相補 繖を圖式化しようとしているのである。 そうすると、「文化におけ う四つの範疇を結ぶ不斷の相互關係」 (五二頁)から、文化の全體組 ようとする。つまり「文化を構成する、技術と價値、社會と言語とい の文化の兩者にまたがつて、この兩者を統合する役割をはたしてい 足し合つていることを意味し、この一定の相關關係の平衡狀態の推 方は、また「文化と有機界」(第六節)において、文化の現象は文化 移から文化變化の理論が誘導されることにもなる。このような考え て人類文化史や文化の運動法則を探ろうとする「文化と天才」(第七 の立場に通じるものとして説明される。さらに文化のタームにおい のタームにおいてのみ正當に説明しうるという「文化は文化から」

の定義」(第八節)は、要約するに、臼文化を無機界および有機界か節)の論議も、この方針の一つの展開と考えられる。つまり「文化

ての特質の二つの點に集約されているものと解されるのである(七ら區別する特質、41人間を人間以外の動物界から區別する標識としの気勢」(第7首)は、要素するに、七支化を無機界および有機界が

日の文化論のための序説的覺え書」以上のものがくみとられるもの檢討に價いする多くの重要な問題點がみられるが、著者のいう「後の範疇分類によるやや具體的な展開をみたわけである。そこには、人類學問答)の發表後二年にして、技術・價値・社會・言語の四つ人類學問答)の發表後二年にして、技術・價値・社會・言語の四つところで、全人類的な見透しを背景に もっ 互視的な科學として

と考えられる。

れ自體の構造の中に自律的な運動法則をもつことが證明されようとについて理解し得たとしても、そのうちの「社會」の概念によつてたついて理解し得たとしても、そのうちの「社會」の概念によつては負相互の關係ということばで、人間と人間の單位的結合を意味することからはじまり、「社會もまた言語と同様に、 ある程度までそることからはじまり、「社會もまた言語と同様に、 ある程度までそることからはじまり、「社會もまた言語と同様に、 ある程度までそることからはじまり、「社會もまた言語と同様に、 ある程度までそることからはじまり、「社會もまた言語と同様に、 ある程度までそれ自體の構造の中に自律的な運動法則をもつことが證明されようとないわけではない。

間の具體的集團としての結合單位としてだけではなく、むしろ、價 しているが、文化の全體構造との關係においては、社會も言語も、 値と技術の統合的關係を擔う、その擔い手としての機能の面を意味 合する役割を演じている……」(五九頁・六〇頁)というように、人 むしろ技術と價値の兩面に對應しつつ、この兩者を一個の組織に統 している場合も考えられる。さらにこの論文の三年以前に發表され のであるが、その存在は、文化以前すなわち人類以前の段階につら 形成するための缺くことのできない一つの基礎的な條件となつたも にのみ特有のものではない。それは人類が人類にのみ特有な文化を いて、「相互關係にある個體の構成する社會集團それ自體は、人類 た「唯物史觀と文化人類學」のなかの《社會について》の項目にお 文化以前の次元における生物としての普遍的な人間生活の中に棲た 自律的な汎時的な運動法則があるとすれば、「その法則性の根據は、 なるものである」 (傍點筆者一八一頁)とのべ、社會構造それ自體の 全體構造の骨格ないし循環系統としてのその機能を検討せられるべ 相互に關係する個人の集團としての社會そのものは、「むしろ〈純粹 わつているのではあるまいか」(傍點筆者一八一頁)とのべている。 著者の考え方の遍歴から推測するに、社會ということばは、つまり、 きものであろう」(傍點筆者一八二頁)とものべている。このような 社會〉の意味において、これを文化の概念から區別し、人類文化の

理解に苦しむところがないわけではない。
では、文化の次元の分析には、とになるのであろうか。そして、この單なる生物學的なムレがいことになるのであろうか。そして、この單なる生物學的なムレが生物としての人間のムレ(コンミュニティー)以外の何ものでもな生物としての人間のムレ(コンミュニティー)以外の何ものでもな

底今日の科學に於て實證出來るものではなく、純粹に作業假説の範によつて大膽不敵な臆説におきかえられている。人間の社會が動物の社會から區別されるのは一にかかられている。人間の社會が動物の社會から區別されるのは一にかかられているにもかかわらず、その事門家でもない一民族學者たる著者しているにもかかわらず、その事門家でもない一民族學者たる著者しているにもかかわらず、その事門家でもない一民族學者たる著者しているにもかかわらず、その事門家でもない一民族學者たる著者によつて大膽不敵な臆説におきなられ、「勿論かかる見解は、到によって大膽不敵な臆説におきない。 一次の事故情報におきかえられ、「勿論かかる見解は、到によって大膽不敵な臆説におきかえられ、「勿論かかる見解は、到によって大膽不敢な意識にあるという大腦と言いなく、純粹に作業假説の範によって大膽不敢な意識にある。

の見解が疑われるものといわねばならないであろう。な大腦生理學的知識を無造作にもち出す點に、著者の科學者としてな大腦生理學的知識を無造作にもち出す點に、著者の科學者としてれの解剖學的座をもつと主張するようにもなる(一二四頁)。その場

# 學說紹介とその展開

『基本問題』においては、社會の集團的次元、構造の面を强調する立場性からして、社會集團の基本的單位としての全人類的な普遍性をもち、また社會人類學の領域の重要課題の一つともなつている「親族集團」に関して、その詳細なターミノロジーをとりあげているのは、別段奇とするに足りないであろう。しかしながら、主としてラドクリフ・ブラウン、マードックの二人の著名な學者の所説を中ラドクリフ・ブラウン、マードックの二人の著名な學者の所説を中の論文こそ、レツドフィールドの「農民社會と文化」および「小地観點は見當らないようである。紹介といえば、次の「小地域社會」の論文こそ、レツドフィールドの「農民社會と文化」および「小地観點は見當らないようである。紹介といえば、次の「小地域社會」のあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土にのあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土にのあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土にのあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土にのあることではあろうが、紹介しようとするものをわが國の風土にのあることではあろうが、紹介しようとするものを知識した上での植附けるための、その準備と心構えが必要なことを認識した上での植附けるための、その準備と心構えが必要なことを認識した上での相対はない。

外はない。その論法でゆくと、狹義の文化と著者が説明する「民族

人を威す式の論議に出くわすにいたつては、讀者は唯々あきれるのりに見出されるように思われるのであるが……云々」といつた鬼面

文化」は腦の視床部に、技術、物質文明は大腦の皮質部に、それぞ

ことでなければならないであろう。ハースコヴィッチの「文化焦點

…文化相對主義の解剖學的根據も、民族と人種の交叉點もこのあた團を出ないものであるが、もしかかる臆説が受容されるとすれば…

説」の紹介を中心とした「文化變動」の論文についても、その點、

同じことがいえるであろうと思う。

地域社會、文化變動へと視點を擴大していく著者の意欲的な活動にしかしながら、紹介を中心としたものとはいえ、親族集團から小

は、注目すべきものが多いと考えられる。

『序説』においては、互視的な「人類文化の科學」の樹立を目指すその立場性からして、「未開民族と原始文化」における遊動採取狩獲民、定住採取狩獲民、地茎栽培民、穀物栽培民、遊牧民族の各々の生活の民族誌學的資料の配列や、「氏族制時代論」における歴史の生活の民族誌學的資料の配列や、「氏族制時代論」における歴史の生活の民族誌學的資料の配列や、「氏族制時代論」における歴史の推了に規定し合う關係にあるという觀點から、世界史的な連續的全體、つまり、先史―歴史―世界史と文化人類學」の論文において、歴史學と文化人類學の對決、その接點、および兩者の統合的研究の必要性に向つている。歷史の記述と文化の分析は、互に他を前提とし相互に規定し合う關係にあるという觀點から、世界史的な連續的全體、つまり、先史―歴史―世界史と文化人類學」の論文において、歴史學の發言とその意義とを組織的にとりあげ、また、文化人類學の後言とその意義とを組織的にとりあげ、また、文化人類學の側におけるこれまでの歴史的關心(女化史的研究)と現在的関心(機能主義的研究)との對置をめぐる論議をとりあげようとしている。人類文化の全體像のもとにおいては、歴史的と現在的とを區別すする書も、対域文化の全體像のもとにおいては、歴史的と現在的とを區別する。

國の民族學界、人類學界の論議をよんだものであつた。 は、當然、歷史的過程の研究を問題としなければならないからである。著者の最近の思索の奈邊にあるかが伺われて興味深いものが多な、著者の最近の思索の奈邊にあるかが伺われて興味深いものが多な、著者の最近の思索の奈邊にあるかが伺われて興味深いものが多な、というのは、歴史的過程と切り

性、すなわち「人間性」の存在を根據としているのである。考え方と一致するものであり、その基盤としての人類における普遍このような考え方は、また、著者の意味する「ヒューマニズム」の

法學研究第三○卷第一○號、昭和三十二年六月を参照されたし。) 點については、拙稿「女化人類學における比較研究の方法について」 一樣性を擴大すべきか否かで、 鋭い意見の對立がみられる。 (この以上に、それから派生するもろもろの文化的次元の現象にまでその以上に、それから派生するもろもろの文化的次元の現象にまでその以上に、 生物=遺しかしながら、「人間性」をめぐる人類學上の論議には、生物=遺しかしながら、「人間性」をめぐる人類學上の論議には、生物=遺

價値の規準というものもなければ、またおよそ異民族同士が相互ついて著者は、才のような表現をやや暗中摸索の型で用いている。とによつて克服することは難かしいように考えられるが、この點に文化の相對性理論を中心とする問題を、人間性の存在を假定するこ

(一九四~五頁)

とくに、人類に普遍の價値規準が實證されない限り、これまでの

搾つてゆけば、 人類に普遍の價値を 實證しうるかと思われる。」反社會的行爲に對する制裁の手段をもつ。……このような規範を「……いかなる社會集團もその秩序を保持するための規範を有しいことにならないだろうか。」(一八八頁)

に理解し共感しうるための、共通の公分母的な基盤も存在しえな

## (一八九頁)

に證明されようとしている。」(一八九頁)てもまた、あらゆる民族に共通した規準の存在することが實験的「倫理的規範はかりでなく、論理の型式や美的價値の判定におい

したものではあるまいか。」(一八九頁)このような人類普遍の生活感情――究極的には人間性――に根ざ時代を超え、民族を超えた共感をよびさまされるという事實も、「われわれが、たとえばすぐれた藝術作品や世界的な古典に對し

な、歴史における客觀的な進步の方向を意味するものと信じる。」現代世界にあつて、すべての人類の承認を求めうる、普遍妥當的「科學的にその存在を證明された人間性の解放こそは、少くとも

以上のような意味では、價値に關するかぎり、文化の相對性理論に、價値評價の規準として事實上認められていたとは云えない。への方向なるものも、たとえば過去數千年にわたるあらゆる文化を求めうる普遍妥當的な進步の規準として提唱した人間性の解放「私が先に、『少なくとも現代世界にあつて』すべての人類の承認

公約數的な規準をなすものが、す な わ ち 人間性に外ならない…「人間性に先んじて善惡の存在する もの で は なく、善惡の最大

はどこまでも正しいであろう。」(一九六頁)

間の承認を求めうる何らかの普遍的價値の規準を見出すことは、必 **うように「現代のように異文化間の國際的交流の進んだ時代におい** 味で、人間性とは何かについての著者の立場からの究明は、すでに 存在を科學上の操作として假定するならば、人間性の存在を「要請」 り、文化の相對性理論を克服するに充分な根據をそれらの文章から 具體的な人類の一様性を確認することができる で あ ろ うか。つま 爲と存在を混同する科學上の論理の飛躍であることを認めねばなら それが可能であるための根據に人間性の存在を規定することは、當 について、その必要性をだれしもが認めないわけではない。しかし、 要でもあれば可能でもあると考える」(傍點筆者一九六頁)という點 ては、人類が自己を起りりべき破局から救うためにも、すべての人 充分に成功しているとは考えられないようである。 勿論、著者のい と、同様の相對的な意味しかもたないのではないだろうか。その意 として前置する立場は、その非存在を「要請」として前置する立場 遺傳的、生理=心理的プロセスの一樣性以外の文化の次元における ないであろう。 以上のような文章に表現される断片的な內容から、果して生物=

問題は、むしろ、現代の諸民族や諸國家が長期にわたる内部の闘 紹 介

ዾ

規準も人類という世界共同體の枠のなかで承認される方向に進むも のではないだろうか。たとえ、その間に一時的な葛藤・闘争の過程 相互のなしくずし的な融合の過程をへて克服されるという點にある 對性も、長期にわたるこれからの全人類的な文化的接觸の過程をへ、 **等と融合の過程から成立したように、現代の人類における價値の相** そ、文化人類學の學問としての意味があるのではないだろうか。そ その新しい共通な何ものかを發見しようとする科學者の 努力 にこ を前置するよりも、現代文明の激烈な交流過程に芽ばえつつある、 のと考えてよい。つまり、實證されざる普遍妥當的な人間性の存在 という枠のなかで承認されているように、個々の文化の相對的價值 なかろうか。しかもその場合、個々の人間の相對的價值規範が國家 がみられたとしても、歴史的な時間の長さにおいてそうなるのでは の點に、哲學的な文明批評と科學的な文明分析の分岐點があるよう

「ソヴィエット人類學界の近況」 および 「民族學における民族主義 文が收錄されているが、この方面の事情に暗いわが國の人類學界に **う。ソヴィエット人類學における民族學、民族誌學、考古學その他** 對し、右の二つの論文は貴重な紹介の勞を果しているものといえよ と世界主義――ポチェーヒンの理論を中心として――」の二つの論 ところで、『論攷』においては、 マルキシズムの哲學に立脚する

に思われる。

===

の影況を理解するに極めて便利である。の學問體系、その政治的立場性、問題領域、その研究成果等、最近

以上の二編の外に、「環境論の再吟味」の論文も収錄されているが、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるので、文化が、もともと人文地理學の領域で發表された論文であるように思われる。

# 日本社會の問題

文化と社會の比較研究をめざす人類學の基本方針からして、わが文化と社會の比較研究をめざす人類學者が日本の文化と社會に非常な關心を拂つているのは、國の人類學者が日本の文化と社會に非常な關心を拂つているのは、

ついての研究が、日本社會の構造分析のために不可敏のものであるおくその立場性から、「日本社會の基礎的構造ともいうべき同族」に基本問題』においては、いうまでもなく社會の構造面に重點を

とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされている。同族組織の研究は、これまで主としてわが國の社會とされ方るものと考えられる。

の立場、あるいは「世界史と文化人類學」に組織的に展開された著の立場、あるいは「世界史と文化人類學」に組織的に展開された著者自身の立場から、日本古代の氏族制度——わが國の建國と紀元を改成る問題——についての再檢討を試みている。その人類文化史的な廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壞を多くのな廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壞を多くのな廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壞を多くのな廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壞を多くのな廣い視野から、氏族社會の構造と動態、その形成と崩壞を多くのな廣い視野がある。

のと推定するほかなく、母系社會から父系社會へという單純な一線ぶ結合原理については、文化により、多種多樣の形式がありえたも本古代社會の發展段階に關する諸解釋に關し、「個人の血緣集團を結族、インカ、中國の各氏族制度の問題を再びとりあげ、さらに、日

のと推定するほかなく、母系社會から父系社會へという単純な一線のが多いといえよう。

簡略に過ぎ充分に理解されない點が多い。
簡略に過ぎ充分に理解されない點が多い。
簡略に過ぎ充分に理解されない點が多い。
一次

# 民族誌學的研究

とつては、同様に得難い貴重な資料となるものと考えられよう。とっては、同様に得難い貴重な資料として高く評價されている。後者中のに、主として各國の文献資料を中心に、それぞれ収録されている。後書館、 三として各國の文献資料を中心に、それぞれ収録されている。後書館、主として各國の文献資料を中心に、それぞれ収録されている。後書館、主として各國の文献資料を中心に、それぞれ収録されている。後書館、主として各國の文献資料を中心に、それぞれ収録されている。後書館、主として各國の文献資料を中心に、それぞれの民族、種族に関は、主として各國の文献資料を中心に、それぞれの民族、種族に関は、主として各國の文献資料をなるものと考えられよう。とつては、同様に得難い貴重な資料となるものと考えられよう。とつては、同様に得難い貴重な資料となるものと考えられよう。とつては、同様に得難い貴重な資料となるものと考えられよう。

## おわりに

考えられる。こと人類學の領域に限つてみても、いままでに考察し努力の如何に困難が伴うかを物語る、何よりも雄辯な證據の一つと方針に如何に多くの多様性がみられるかは、かえつて、このような乃針に如何に多くの多様性がみられるかは、かえつて、このような人間の社會と文化を解明する努力は、人類學に限らず人文科學、人間の社會と文化を解明する努力は、人類學に限らず人文科學、

二四四

てきたように、決して單一の平板な道を步んでいるわけではない。

の間の限界領域的な特殊性がみられるのである。 で、その文化と社會の解明の方法に、社會學と社會人類學との兩者 偏りが拔けないであろう」(傍點筆者二頁)と考えられる。その意味 會學の畑に育つた著者の社會人類學觀には、何といつても社會學的 **社會學界においても主要な地位をしめ、著者自身もいうように「社** 『基本問題』の著者は、イギリス社會人類學の立場に近くわが國

欲的な攝取・統合を試みているが、「……まだ若い新しい、 いわば 化史的民族學に深い造詣をしめし、戰後はアメリカ文化人類學の意 る。さらに、「人類學は、人間とは何かという、 古來の哲學者の根 できるだけ體系立てて説明できるよう、努力が拂われているのであ は「現代におけるこの學問の中心的な諸課題とその解釋の方向」を 學」と規定された文化人類學のあり方に對する著者個人の理想像で イメージをそこに描こうとしている。「全體としての 人類文化の科 つである文化人類學という専門分野についての、著者自身の一つの さまざまの異つた見解を抱いている」、そのような 新しい 科學の一 生成期にある科學の中には、さまざまの學者が、その性格について それに反し『序説』の著者は、戰前からのウイン學派に屬する文

價する方向の一つであるといえよう。

境にこだわるところのない國際的な視野のもとから生まれたものと このような理想像は、すでにウイン學派、アメリカ學派といつた國 いつても決していいすぎではないであろう。

『論攷』の著者は、「私は文化人類學專攻の 一學徒としての久し

(二し三頁)とことわつているように、この著書の鰤片的な諸論文か 卷の書物に纒め上げたものであり、一部は事門の雑誌に、一部は綜 不遠、上梓する豫定であるが、本書はそれにもれた若干の論文を一 きにわたる研究活動の成果を集成し、『人類學的文化像』と題して、 理學上の知見に著者のいう「綜合人類學」の接點を求めようとする 解され易い危險に陷るかも知れない。しかし、量子生物學や大腦生 傾向は、別の意味で、いまさら新奇な試みではないとしても注目に ら理解しようとする限りにおいては、その著者の意圖ははなはだ誤 合雜誌に發表したもので、いささか學俗混淆の嫌いがあるが……」

偏狹なのれんや繩張りの意識から、自己のそれと異なる學問名稱の らのイメージを、これらの名を冠した學問の對象や目標に對して描 られるかも知れないが、『序説』の著者もいうように、「それぞれ自 種々さまざまの考え方が成り立つということは、一見、奇異に感じ くのは、各學者の自由である」(一頁)ことは間違いなく、「なにも 同じ文化人類學あるいは社會人類學の名稱のもとに、これほどの

識が、つねにこの著者の背後にひそんでいるといつてよい。著者の 本課題を引きついだ綜合科學ではあるまいか」 (四頁)という目的意

ところを知るであろう」(一頁)という科學者としての見識のうち 用い方を目の敵にして妨害を試みなくても、堂々と所信を披瀝し合 ものと考えられる。事實、『基本問題』の著者にしても、 あるいは に、この幼ない生成期にある文化人類學の將來の發展が約束される **う百家爭鳴のうちに、學界の公正な良識は、おのずからその歸する** 

『序説』の著者にしても、それぞれの所信を相互に披瀝し合うその討

實績が指摘されよう。

論の過程において、戰後十年間におのずから相互に歩み寄つてきた

が、その意味でも生かされることになろうと思われるのである。 本稿で三つの著書を相互に比較しそれらを概觀したことの 意義

(十時嚴周)